

AKL

ART KISS LETTER
FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum,
Kumamoto
vol.23



m u s e u m i n f o r m a t i o n



CAMKえんにち 2005.8.6

鏡に映った絵をなぞるゲームや、名画にふきだしをつけて楽しむアトラクション、PCを使ったバラバラアニメ作成など、おもしろ模造店目白押しの「CAMKえんにち」が開催されました。このイベント、じつは、当館で実習中の学芸員実習生12人が、課題研究で企画したもの。それぞれの研究分野と個性を活かしながら、受付を工夫したりフェイスペインティングしたりと、チームワークで楽しいお祭りを作り出しました。訪れた人は、大人も子供もゲームやアトラクションに夢中。「長崎から来ました、とてもおもしろいイベントですね。原本はいいなあ。来年も来たいです！」(来館者の声)と大好評のえんにちでした。(K.K)



宮崎山でのアートキャンプ

子供芸術大学特別講座「アートキャンプ」

夏休みに子供芸術大学特別講座として昨年より、アートキャンプを開催しています。今年も小学生8名、当館に学芸員実習にきていた学生12名、南郷忠隊長(当館館長)と学芸スタッフ2名の計23名で、大自然に囲まれた金峰山少年自然の家で7月31日・8月1日にキャンプを行いました。

1日目にはテントを張り、色んな虫や鳥がいる森林を散策して自然を体にした後は、みんなで分担してカレーを作りました。ご飯もおいしく炊けて大満足！夜はナイトハイクと花火。盛りだくさんの活動でみんなぐっすり眠りました。

2日目に突然の大雨に遭いましたがそれも自然ならではの体験。この日は木工でプレゼントを作り、閉会のついでで交換しました。

元気いっぱい活動する子供たちの笑顔がとても印象的な、楽しいキャンプになりました。(A.T)

アン・ハミルトンさん来熊

去る7月18~21日、アン・ハミルトンさんが展覧会の打ち合わせに来ました。

ハミルトンさんは1956年アメリカ合衆国オハイオ州リマに生まれました。1999年のベネチア・ビエンナーレでは、アメリカ代表作家に選ばれ、壁と天井の接点からピンク色の粉が落ち、壁面に記された点字のわずかな突起に降り積もるインスタレーションで注目を集めます。2001年には横須賀の倉庫に15万本の燐長炭をつるしたインスタレーションを発表しました。場の歴史や状況を自らの目で確かめ、空間を作り上げていくことで評価の高い作家です。

今回は、滞在していたホテル周辺の朝のクマゼミの音に感発されたのか、サウンドを展示の中心にしたいとの案ができました。お城周辺のクマゼミ、阿蘇の噴火口、ヒグラシの音を採取し、現在、構想を練っています。アン・ハミルトン展は2006年2月26日~6月4日の予定です。熊本での新作をどうぞお楽しみに。(Y.H)



アン・ハミルトンさん

インターナショナル・アドバイザー講演会

「ロシアの現代美術」

7月24日14:00-15:30 ホームギャラリー

第2期インターナショナル・アドバイザーのヴィクトール・ミジアーノさん(ロシア美術文化省副長官)が、映像をふんだんに用いて、体制が変動した90年代前後の、アーティストの実体験と社会とのかかわりが深い作品、また現在の美術の状況をご紹介します。(Y.H)



ヴィクトール・ミジアーノさん

刺繍ワークショップ

「forget me not/あなたの名前を忘れません」

8月6日(土)、刺繍ワークショップ「forget me not /あなたの名前を忘れません」を開催しました。このワークショップは、自分の名前、大好きな人、家族、ペットの名前を刺繍するワークショップでしたが、参加された皆さんが丁寧に選針しつつ、それぞれの思いを楽しく話しあうイベントとなりました。ひとりひとりの個性あふれる刺繍によって自分らしさを表現しつつも、皆でひとつのものを完成していく喜びが体験できました。この作品は、宮島達男展会期中、キッズサロンに展示されます。(H.T)



くまもとアートポリス「KAPの新提言」

くまもとアートポリス(KAP)の3代目新コミッショナー伊東豊雄さん、新アドバイザー桂美昭さん、末廣香織さん、智哉部島史さんの三人による、KAPのこれからの展開についてのディスカッションが、8月6日(土)、ホームギャラリーにて開催されました。伊東豊雄さんによる「木材の豊かなこの熊本で、新たな木材建築の可能性をつくりだす建築に挑戦して欲しい」との提言や、球泉洞のレストハウスのコンペ開催についてのアナウンスメントなど活気のある会となりました。(H.T)

*くまもとアートポリスについての詳細は、以下のHPをご参照下さい。
<http://www.pref.kumamoto.jp/traffic/artpolis/index.html>



上村清彦リーディングパフォーマンス

9月14日、夜間開館日2日目に上村清彦さん(ゼーロンの会)による12時間リーディングパフォーマンス(10:00-22:00)が行われました。パフォーマンスは《Mega Death》前で行われましたが、まるで洞窟の中で発語しているかのように、会場に静寂と声の反響が繰り返し響き返って特別な空間が出来上がっていました。上村さんの声もすっかり現れたパフォーマンスの最後の方では、ゼーロンの会のメンバー数名も参加し、上村さんを応援していました。パフォーマンス終了後の上村さんの「充実していました。メガアス、たっぷりと僕の胸の中に染み込みました」との言葉が印象的でした。朗読された書籍:「パウル・ツェラン全集」3冊、エドモン・ジャベス「ユークルの書」(H.T)



上村清彦さん

夜間開館 夏の映画祭「うなぎ」&「ラストサムライ」

8月13日(土)、14日(日)の夜間開館に合わせ、ホームギャラリーにて夏の映画祭が開催されました。「ラストサムライ」は立ち見になるほどの盛況ぶりでした。今年の夏の映画祭の大きな特徴は、「日本語字幕付き」で上映したこと。聴覚障害者の方々に日本映画を楽しんでもらうと同時に、健常者の方にも「日本語字幕付き」とはどういったものか、映画の中の音を字幕にするとどう表現されるのか知ってもらいたいという思いから、字幕サークルおむすびさんのご協力のもと開催しました。

「聴覚障害者の方が健常者と公共施設で一緒に映画を楽しめる配慮の温かさを感じることができました。自分もいつ障害者になるかわかりません。有難い配慮がうれしいです」(アンケートより)これからも、たくさんの人に足を運んでもらえるような上映会を行なっていきたいと思います。(E.Z)



字幕サークルおむすびのみなさん

SUITOTTO KUMAMOTO

(スイトット・クマモト)

今年度のスイトット・クマモトは、当館の展示室GIII(ジースリー)での展覧会をご紹介します。

GIII.vol.30 (2005.8.3-9.4)

「青春の山脈」第2弾 セルパンの庭展



展示風景



展示風景

熊本の若き芸術家たちが集い、語り合った現象画セルパンで恒例となっていた「一人一画展」を熊本市現代美術館にて復活開催いたしました。71名のセルパンゆかりの作家の皆さんに「セルパン」への想いを込めた新作を出品していただきました。同時に、セルパンで奮闘をされた物故者の方々の作品や当時の様子を伝える写真や資料を展示いたしました。

すべての芸術家へ門戸を開いた正木さんご夫妻、熊本の文化の発信地となっていたセルパン、今も多くの人の心の中にその姿が残っているように、青春時代をセルパンで過ごした方々の今も変わらぬ熱意とご夫妻の愛しさが伝わってくる展覧会でした。(N.I.)

●進捗セルパン略歴

昭和21年(1946)正木忠男さん・絹さん夫妻、熊本市花畑町の坪井川沿いに、テラスと庭のある喫茶店「セルパン」開店。

昭和22年(1947)秋、第1回企画展「逆心会」(田代順七、岡岡宗、宮崎東里、相山春枝ら)開催。以後、約1500回の展覧会を、賞賛材料にて開催。また、森山裕之、春口光雄、宇野千里、前森三郎ら若き芸術家の留学資金を募る活動も行う。

昭和28年(1953)大水害の被害を受ける。熊本市区研会館二階に一ヶ月閉館。

昭和36年(1961)常連客による「セルパン会」発足。

昭和37年(1962)常連の文化人たちが資金を拠出し、店の改装。「セルパン」第3回企画展「逆心会」開催。

昭和39年(1964)花畑可曇寺通角、津の国ビル二階に移転。

昭和63年(1988)12月28日、閉店。

平成元年(1989)1月19日、「さよならセルパン」正木夫妻の分をねぞらう会(鶴屋八郎)開催。

平成3年(1991)12月18日、正木忠男さん逝去(享年72歳)。

平成17年(2005)熊本市現代美術館GIIIにて、「セルパンの庭」展開催

WORLD NEWS



会場風景

●ブラハ国際現代美術ビエンナーレ

チェコの首都ブラハで「ブラハ国際現代美術ビエンナーレ」が開催されました(6月12日-9月11日)。このビエンナーレは2年前に始まった「ブラハ・ビエンナーレ」が、ブラハ国立ギャラリーの主催によるものと、美術雑誌社であるフラッシュアートの主催によるもの2つの国際ビエンナーレに別れ、ここに紹介する「ブラハ国際現代美術ビエンナーレ」はブラハ国立ビエンナーレで開催されたものです。「Second Sight」、つまり「第2の視覚」をテーマに、世界約30カ国からアーティストが集まり、日本からは熊本市現代美術館の開催記念展「熊本市現代美術館 ATTITUDE 2002」にも参加していただいた BuSu do la Madeleineさんらパフォーマンスを行い、喝采を浴びました。ベネチア・ビエンナーレに導くような資本主義の臭いのない、純粋にアートを市民に開放しようとするメッセージは、今後の世界のアートシーンの変革にどう届いていくことでしょうか。(南真宏)



熊本市現代美術館の「グエリラ・ガールズ」のポスター。2002年、ヴェネチア・ビエンナーレ

●ベネチア・ビエンナーレ

ベネチア・ビエンナーレが今年も水の都イタリアのベニスで開催されています。今年は51回目。すでに110年という歴史を刻んできた世界最大の国際的な現代美術の祭典です。今回はその長い歴史の中で、マリア・テラコールとローザ・マルチネスという、スペインの2人の女性キュレーターが指揮を執ったということが話題になりました。ジャーナリズムの多くも、これまでの男性中心の考え方で支配されてきた国際美術壇のあり方に大きな批判を与えたと報道しています。しかし、これは浅い報道です。元々はアメリカの美術評論家でありキュレーターであるロバート・スタインに依頼があったのですが、短い時間で準備は不可能ということで拒否したため、急遽2人の女性キュレーターが選ばれたというのが実情だからです。ですから、厳密な意味において、フェミニズムの視点がこのビエンナーレにどこまで深い根を下ろしているかは疑問といわざるを得ません。しかし、その中で日本の代表作家として選ばれた石内都さん(コミッションナー・荻原美穂子さん)の展覧が、喧嘩のビエンナーレにあって、ひとさき静謐の空間を作り出し、私たちの心を癒してくれたことは、大変うれしいことでした。(南真宏)

●お知らせ

・10月12日(水)をもって、熊本市現代美術館は開館3周年を迎えます。当日は、開館記念日として、展覧会入場料が無料となります。あわせて、特別イベントとして、歌人の安永美穂子さんによる講演会「美の真実に触れるとき」が開催されます(14:00-15:30、館:ホームギャラリー、無料)。みなさまのご参加お待ちしております。(H.T)

・エントランス「命の花壇」の植え替えをしました。8月4日に「命の花壇」の植え替えを行いました。今回は一部植え替えと子どもたちが夏休みということもあって、熊本市立真光小学校の美術科の先生方だけの作業でした。新しい色のペチュニアを植え、伸びてしまった花壇みを行いました。夏の太陽をいっぱい浴びて、元気よく咲いています。(R.Y)

・階段ギャラリー展示替えをしました。7月31日-8月1日に開催されました子供芸術大学特別企画「アートキャンプ」参加者の元気いっぱい活動した写真を飾っています。キャンプ2日目に作った木工作品も一部展示してあります。(R.Y)

執筆一覧

●ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

菊城 山子 Syozan Kaneshiro (書道家)
 森山 扶華 Tanso Moriyama (書道家)

本田 代志子 Yoshiko Honda (熊本市現代美術館学芸員)
 藤原 江美 Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
 金澤 謙 Kodama Kanazawa (熊本市現代美術館学芸員)
 富澤 治子 Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)
 山室 理紗 Risa Yamamuro (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)
 竹田 茜 Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)
 伊豆 菜々 Nana Izu (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)
 園田 穂美 Satomi Sonoda (熊本市現代美術館学芸員アシスタント)

編集後記

アートキッスレター夏号は恒例の博物館学芸員による特別編集号です。他誌とは一味違う盛り沢山の内容で構成される、我が熊本市現代美術館での実習に、今年は6大学12名の元気な学生誌者が集いました。そのフレッシュな感覚が詰まった、今年の夏の熊本の、新しいアートシーンをお届けします。

編集長 南真宏

今号のArt De Gyanは、平成17年度学芸員実習生のみなさんに、実習課題としてご執筆いただきました。(書量は通常通りです)

◎実習生執筆一覧(敬称略、50音順)
 荒牧美佳(M.A)、木下多恵(T.K)、佐藤梨絵(R.S)、徳留永子(E.T)、中村英里(E.N)、西坂友希(Y.N)、保坂賢郎(K.H)、洞口尚子(N.H)、前田地生(C.M)、松河都(M.M)、松本ちづみ(C.M)、村崎悠香(H.M)



「熊本市東部公民館・木曜絵画サークル2005展」 8.10-8.10 画廊喫茶ジェイ

熊本市大江本町6-9(林間天神電停前) TEL372-8732

レトロでアットホームな店内の雰囲気なか、絵画サークルのみなさんの力作が目に見え込んできました。このサークルは30代から70代という幅広い年代の16名の方々がいらっしゃるそうです。楽しく描いていらつしやる様子のびのびとしたタッチや色使いからうかがえました。静物や風景画が中心で、豊しく柔らかな雰囲気のある作品のなかにも力強く活き活きとしたエネルギーを感じました。ひとりひとりの個性が光る作品ばかりでした。茶室にお客さんの中には絵画を身近に感じられて楽しいという声や、色づかいが気持ちよく美しいという声がありました。明るさや元気を与えてくれる、そんな展覧会でした。(M.M)



「能面展」 2005.8.3-8.8 アートスペース大宝堂

熊本市上通5-6 TEL354-2155

能面彫刻岡安宗師館の守本玲子(※-藤崎)さんによる初の展覧。守本さんは7年前から能面製作を始め、今年の一月に師範の免許状を取得した。今回は、30点ほどの作品が壁一面に掛けられて展示された。能や狂言で使われる面には様々な種類があり、それぞれの作りが個性的である。若い女性の純粋な美しさを表現した「小面(こおもて)」は、輪郭がふくらみとして優しげな微笑をしている。小面よりも成熟した女性を表現したのが、「増女(そうおんな)」の面である。小面よりもややシャープな印象で、「羽衣」の天女や女神の面として使われる美しい面である。「お多喜(おたき)」や「般若(はんにゃ)」など、比較的馴染みのある面もあった。豊富な線や人間の感情が巧みに表現されており、照明が当たって表れた陰影がとても印象的だった。(T.K)



「NHK熊本文化センター『基礎からの油絵』教室」 2005.8.2-8.7 熊本県立美術館分館

熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

NHK熊本文化センター主催の「基礎からの油絵」教室は現在13名が所属している。講師は日本美術家連盟会員の木戸正樹先生で、月2回テーマに沿って各自描きたいものをモチーフに楽しく絵を学んでいる。また年に2回は阿蘇で写生をしたり、デジタルカメラで風景を撮影したりと、アウトドアな一面もある。
 今回の展覧会では11名の力作の数々が展示されていた。描かれた絵は海や山、真夏の街並み、人物や動物など様々であり、全体としては明るく優しい雰囲気が漂う。しかも「基礎からの油絵」とは思えないほどの実力で、ついつい見入ってしまうものばかりであった。「花が好きなので、それをずっと描いてみたかった。」という、開校以来は今年の花の絵を3点出品されていた。「絵を描いているときはとても楽しいし、リラックスできる。」という、開校の絵く花は、どれも凛々しく、生き生きしており、見ているものの心も和ませてくれる優しさにあふれたものであった。
 受講者は描き始めてから半年という人から、5年も通っているという人まで、実に幅広い。しかしながら、指導はそれぞれに合わせて丁寧に行われている。皆が伸び伸びと絵を学べるこの場所に、絵に少しでも興味がある人や、自分で絵を描いてみたいという人は、ぜひ行ってみたいと思った。人生の楽しみが広がること受け合いです！(C.M)



「緒方信行写真展『悠久の大地・インド』」 2005.8.2-8.7 熊本県立美術館分館

熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

1983年よりインドを撮影旅行をすること12回、緒方信行さんの写真展。撮影した2万枚の中から、約80点を出展。「インドの雄影を捉える理由、それは我々の眼が捉えきれないから。」と話す緒方さん。その言葉の通り、展示している風景地帯の過酷な、山岳地帯の少数民族、南インドの過酷な生活からは、私たちの忘れてしまった素朴な日常生活が溢れている。展示作品は、人々の日常の顔そのものの写真が多く、自分がそこに居るような錯覚を引き起こさせる。個々の写真が、まるで「悠久の大地」と名づけられているように、作品全てが醸し出す雰囲気により、インドの雄大さを感ぜられる展示会だった。(R.S)



「真実会有志展」 2005.8.1-8.10 画廊喫茶「南風堂」

熊本市千歳町5-13 3F TEL343-9664

真実会とは、故・谷田起敬氏が指導者となり、美しいものを描こうという目的から結成された。既に誕生して30年を越す。現在50歳代から70歳代の30名以上の会員が在籍している。谷田氏が亡くなった後も、生徒たちは谷田氏の遺志を引き継ぎ、年に2回の展示と火曜日の水曜日の週2回谷田氏の家で勉強会を行っている。谷田氏がどれだけ懸念されていたかが窺える。
 今回の展示会は真実会の有志たちによる絵画展で、店内にはF4~F6サイズの10点を越す油絵が飾られていた。熊本の雄大な自然や美しい花、可愛いお人形は、観る者の心を和ませる。真実会の創設者である谷田氏が、定期的に阿蘇を訪れその雄大な風景を描くことを好んだというだけあって、今回の展示会にも熊本の山々を描いたものが多く見られた。谷田君一さんの作品「五月の北外輪」は、広大にそびえる阿蘇の外輪山を背後に、田舎を眺めたばかりの澄然とした水田が広がるという構図になっており、水田の清らかな水面に五月の雲が映るさまは谷田氏の作品「初夏の飯田山」のそれを彷彿とさせた。
 今後も身近な美しい素材とする真実会の活動に期待したい。(N.H)・(H.M)



「生活空間に木・布のぬくもりを展」 2005.8.2-8.7 熊本県伝統工芸館

熊本市千歳町3-35 TEL324-4930

福岡の八女で漆塗と木の器を作っている熊本知伸さんの作品展。漆塗は八女に古くから伝われてきたもので、「八女和ごま」と呼ばれ親しまれている。ドングリのような丸みを帯びた形の肥後ごまと比較すると、八女和ごまは内輪形に近い曲線的な形状をしている。熊本さんの家は百年以上前から八女和ごまを作っていたが、父の代からは漆塗作りの技術を生かした木の器作りも始めた。木の器はクスノキなどを削って作った器に、漆塗やアマニ油といった天然の塗料を塗り込んで優しい色合いに仕上げている。漆工芸家との合作のお陰は、漆が木の質感を生かすように塗られていて、暖かみのある天然素材の器を毎日の食卓に使って欲しいという熊本さんの願いが込められている。
 今後は八女在住の工芸作家達と生活に根ざした八女の工芸文化を発展させていきたいという。(Y.N)



「第五回天然記念物水前寺ノリ産地を守る色紙チャリティー展」 2005.8.1-8.10 画廊喫茶「三点鐘」

熊本市手取町3-8 3F TEL326-3040

三点鐘のオーナーである小山淡花子氏は人吉市出身で、津川の綺麗な水の近くで育った。現在、水環境保全全国大会などに関わるようになり、津津湖の水前寺ノリの復元、あるいは水の保全を目指し、熊本の人々にもっと水に関心を持って欲しいということから水に関する展覧会を5年前に企画。それから毎年、夏の間はこの展覧会を開催している。今年は、県内外から熊本にゆかりのある作家による、主に水をテーマにした色紙作品が36点集まった。色紙ということでも作品は水彩が多く、海辺や川辺、花や阿蘇山などみずみずしく、そして夏を感じる作品や涼しげな作品が多い。最初はジャズが流れる店内だが、この展覧会の開催中は、オーナーの小山氏が自ら水や河川をテーマに作曲した音楽が流れ、水の展覧会をさらに引き立てる。展覧会はチャリティーとして企画されていて、作品の売り上げは、30年続く津津湖の天然記念物である「水前寺ノリ保存会」に贈られる。(C.M)



「中林忠良展」 2005.8.3-8.22 ギャラリー・カフェリユー

熊本市上通4-10とらやビル3F TEL355-8367

賑やかな上通通りを歩けば、必ず目撃される。今年、今年にオープンしたばかりの新しいギャラリー「ギャラリー・カフェリユー」の看板が見えてくる。
 ギャラリー内は、花と木と白を基調とした明るく落ち着いた空間が広がる。スペースで、コーヒー・ヘルシー・ランチをいただくことが出来る。正面にある大きな窓からは、やがて日差しが差し込み、外のつらなるような暑さを忍びかされた。ここを訪れたら時間がゆっくりに流れているかのよう錯覚に陥るだろう。
 今回のギャラリーオーナーのコレクション「中林忠良展」が展示された。作品は版画作品が中心で、そのうち2点は「山の日記」という連作のなかの1部で植物がモチーフとなっていて、ギャラリーの緑や木々も手に入ると高潔の真ん中にあるような気分になった。作品の中には文章が書かれて、中林さんのアトリエが森の自然や動物に囲まれている情景に似ているようにも思えた。そのほかにも若手作家大友の作品も見ることができた。作品は落ち着いた穏やかな気のあるもので「自分が好きだな」と思ったものを購入している。オーナーは話してくれた。今回の展示は「H20×H20」展現代作家を取り上げた展覧会を開催する予定。(E.N)



「豊後絞り藍染め展」 2005.8.2-8.7 熊本県伝統工芸館

熊本市千歳町3-35 TEL324-4930

工芸館の入口からすぐ、絞り藍染めのタビストリー作品が涼やかに涼やかな空間をしきり、中には藍染め作品の数々、タビストリー、着物から浴衣、Tシャツ、キャミソール、靴下などが置かれていて、そこには、藍色の爪をもつ田中真夫さんが丁寧に話をしてくれる。その様子には作品に対する姿勢や思いが伝わってくる。
 現在、奥様の清子さんは入院中なのだが、真夫さんから制作中のお話を伺うと、その作品制作へ対する熱い気持ちと、一つの作品を仕上げるのに、一針、一針めいながら、五百針から八百針を使用し、思いどおりの色を出すために染付けを何度も繰り返す。藍染め作業の工程の細かさに圧倒される。
 また、田中さん夫妻は、藍の色や、デザイン面の面白さだけでなく、絞効果や布を丈夫にするという特質をもっており、それを活かした日常着の提案もしている。それらはアトリエなどだけでなく、敏感な人にももちろん、発刊時のおいなどもふせ、昔ながらの知恵を再確認することが出来る。
 作品は購入も可能で、身近に置いておきたいものもあり、田中夫妻の熱意や、藍染めの工程を聞くのも良い経験となった。(E.T)

「天solaの器とオカリナ展」 2005.8.2-8.7 熊本県伝統工芸館

熊本市千歳町3-35 TEL324-4930

阿蘇郡西原村の窯元「天」solaで活躍されている福山宏さんの作品展。入口の両側には様々な大きさのオカリナが展示されており、オカリナを使ったミニコンサートも聞かされていた。その、やさしく包みこむような音色は、神秘的でありながらもあたたかかった。オカリナのほかに、濃厚で迫力のある器や、コバルトによる独特の深い青の釉薬や彩色が印象的な器など、素朴な中にも深みのある作品が並んでいた。豊の空間と作品に響かされた和の静けさ、そしてオカリナの音色が合わさり、さわやかな雰囲気と時間が流れていた。
 作品を作り続けて20年の福山宏さん、その作品はどれも人の温もりや生命力が感じられ、その福山さん自身の「天」solaでは体験演奏も実施されており、非常に興味深い。(K.H)



「川上周一展 ス페인・アングルシア ~大地・静けさの中で~」 2005.8.2-8.18 くまもと阪神

熊本市千歳町3-22 TEL322-1111

テーマは「スペイン・アングルシア大地の静けさの中で」というもので、スペインで描かれた数十枚の作品が展示されていた。展覧会は風景画を中心に構成されており、それらの絵からはスペインの異なるイメージが伝わってくる。青空と白壁の家の絵画では、青と白のコントラストが美しくさわやかで、木々は青々としておりスペインの植物の強さが感じられる。「スペインの春は花がとても綺麗で、日本では考えられないほど美しい光景です。」と川上氏が語るように、春、初夏の絵では鮮やかな色の花が描かれていた。また、風景画だけではなく静物画、人物画も同時に展示していた。人物画ではスペインらしい西牛士の絵画が3点展示されており、その中の牛と顔触る直前で赤い布をひるがえした西牛士の絵は、真剣勝負の一瞬をとらえたもので、緊張感と共に躍動感があり、自分が実際にその場に居るような印象さえ受けられる。また、絵画だけではなく彫刻も展示されている。彫刻は作者の思いを表した抽象的なものも多く、川上氏の独特の感性が感じられる。18年間スペインで暮らしている川上氏の情報が随所に感じられる展覧会だった。(M.A)

「第11回大東文化大学熊本県書作展」 2005.8.2-8.7 熊本県立美術館分館

熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

熊本県在住の大東文化大学書道学科卒業生と在校生による作品展で、45人が漢詩や俳句、短歌等を筆・墨書や行草書体で書いていた。表現は古典の書道から創作まで中央書道にならってバラエティに富み多彩である。
 城本雅城さんの「高適詩」、安部春山さんの「燈」、吉澤寛美さんの「夜月」が目立った。中村繁雄さんの伊勢左平の歌2首は、雅趣もあり変化に富む詩意はさすがである。安武美穂さんの「忠恕」の篆書も意匠が力強い作である。高野英山さんの「空海詩」は筆風ではあるが自由な筆さばりがこころよい。
 岡大書道部教授の田中節山さんはじめ田中東竹さん等9人が賛助出品していた。中でも新井光風さんの「蘭傳」(とちだち)は線質も強く作品構成もうまく、白が生かされていてインパクトの強い作である。同じく高木厚人さんの芭蕉の句「雲の峰 いくつづつづつ月山」は親しみやすく見えた。(S.K)